生徒会会報！

藤碕篤綺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生徒会会報！

【Ｎコード】
Ｎ４５２７Ａ

【作者名】
藤碕篤綺

【あらすじ】
俺、中原雪弥は、顔も頭も運動神経も身長も体重も全部普通の高校一年生。ある日、俺の唯一非凡な能力を天下の美形生徒会長様から見込まれたことで、今まで知りもしなかった世界に足を突っ込んでいくことになるんだけど…。俺は普通の生活を送りたかったのに、戦いとか敵が他校生とか、何より周りが美形集団だなんて理解できない！これからの俺の生活はどうなるんだ！？

第一部〜今迫る、聖倫の真実〜

三月は、俺にとって本当に地獄の月だった。
まず、志望公立高校だった東英高校に見事に落ちた。
先生は合格ライン言ってるって言っていたのに。
まあ、それは俺が悪いんだ。数学の解答欄間違っちまったし…
そして同時に、
犬に噛まれたり、
教科書をなくしたり、
財布を落としたり、
一番酷かったのは、二ヶ月間付き合っていた彼女に一方的に振られたことだ。

『ねえ、雪君』
突然呼びとめられて、何かいいことでもあるのかと期待してた俺に向かって、
『高校も違うし、もう別れない？』
そう、けろりとして、いや寧ろ嬉しそうに、笑ってた。
……なんですか、それ。俺が公立落ちたのが悪い、って言いたいのか？
お荷物がなくなってせいせいしたとか？
ていうか、俺の片想いだったんだよ、な……
向こうは俺のことなんて、ただのアクセサリーくらいにしか思ってなかったんだ。
それともごく普通の俺は、アクセサリー以下だったらどうしよう。
そんなことより。
酷い。
酷すぎる。

だから、決めた。

高校が公立じゃなくったっていい。
彼女なんて、いなくていい。
そして出来れば、高校に入って俺のことだけを愛してくれる可愛い女の子と仲良くなりたい。
まあ、それは無理だとしても。

中原雪弥、１５歳。この春、聖倫学園に入学しました。
高校生活最初の春、俺は華麗に華を咲かせましょう！

生徒会会報！
第一部・今迫る、聖倫の真実

とは、言ったものの。
実際に、俺という男にそれを実行する度胸はなかった。
「……はあ……」
新しい教室に入り、クラスの自己紹介の順番を待ちながら、俺は大きな溜め息を吐いた。
うちのクラスの担任は、（名前、忘れた）は今時いなそうな熱血教

師で、
『何かの縁でクラスが一緒になったのだから、これは運命だ。運命に感謝しお互いのことを知ろう！』
とかいう無茶苦茶な理論を展開し、
クラスメイト全員名前と簡単なプロフィールを言わなければならなくなってしまった。
そういう自己紹介は、俺にとっては苦手なものの一つだ。
俺は格段成績がいい訳でもないし、飛び抜けた運動能力を持っている訳でもないし、
人がびっくりするような趣味がある訳でもないし、また逆に笑い話にするほどの苦労話や酷い話も全くない。
特技だって、何もない。
いや、一つ心辺りはあったけど、あまり人に言いたいような特技じゃないんだ。
出来れば、誰にも知られたくない。
「……おい、雪弥」
俺の右肩をつん、とつついたのは、俺の中学時代からの友人でもう四年間ずっと
同じクラスの腐れ縁、高蔵充だ。
充は中学時代からサッカーをずっとやっていて、実力もかなりある。
俺も昔ほんの少しサッカーをやったけれど、どうしても俺に合わなくて一週間で挫折した。
まあ野球もバスケも、バレーも武道も、どれも続かなかったんだけど。
別に特別下手だった訳じゃない。
ただ、俺にとって何か一つのことに打ち込むのは、難しいことだった。
いつも、どんな時も、俺は”普通”だから。

成績は先生から期待されるほどの優等生でもなければ、
先生が溜め息を吐きたくなるほどの赤点族でもない。
運動だって、将来を期待させるエースでもなければ、
体を鍛えろ、と指示される貧弱プレイヤーでもない。
容姿だって誰もがみとれる超美形でもなければ、
誰もが顔をしかめるブ男でもない。
期待の星でも問題児でもない、ありふれた”普通”の奴。
それが、俺。
俺、中原雪弥だ。

とりたてた長所も短所もない奴は、何が自分にあっているのか、何が自分には合わないのか、さえ分からない。
だから、何か自分が夢中になれることを見付けられる人は、すごく羨ましくて。
充は、そんなうらやましい人間の一人だった。
「……お前どうせ、また悩んでんだろ？何言おうかって」
充が、ちゃかすように笑った。
「……うっせえな、仕方ないだろ……」
俺はげんなりして呟いた。
「生憎、俺はお前と違って何も出来ないんで」
俺の言葉に、充は更に面白そうに笑った。
「なあに言ってんだ、お前～。雪弥、お前には”あれ”があるだろ？」
グサリ。
充の言葉が、突き刺さる。
「……あれは……」
「いいじゃんか、あれは十分特技だぜ？上手くやれば女の子にモテモテになれるかも」
「……下手すりゃ引かれるけどな……」
俺は大きく大きく、溜め息を吐いた。

”あれ”か。

充のいう”あれ”とは、俺にある唯一の、特技というか、人間離れした能力のことだ。

出来れば、あれはあんまり知られたくないんだけど。

確かに上手くいけば人気者だろうが、激しく引かれる可能性もあるから。

実際、中学時代の友人数人に言ったところ、激しく誉めてくれたのは充だけで、

あとは苦笑が二人からかいが二人呆然が一人、という内訳の反応を取られた。

どうしよう。

「……ほら、次お前の番だぜ？」

いつのまにか充の番も終わり、自分に回ってきてしまっていた。

やばい。

どうする？俺。

充に促され、皆の視線が俺に集まる中、俺はゆっくりと立ち上がった。

注がれる、視線。

うう。

注目されることが滅多にない凡人は、こんなことでも緊張してしまう。

黙ってつっ立っていた俺の横腹を、充が”早くしろよ”とこづいた。

……覚悟を決めろ、雪弥。

頭の中は真っ白だった。

お前は高校で華々しいデビューを飾るんじゃないのか？

ここで特技くらいぱあっと披露してみろよ、男だろ？

いや、待て。あれはあまりにも馬鹿らしい。

でも、でもでも……

「……どうしたんですか？中原君」
熱血先生が、俺の名を呼んだ。
覚悟を決めろよ、中原雪弥。
俺は、
俺は、

高校生になって、華々しく活躍するんだ！

ガタン、と机を揺らして立ち上がった。
たったそれだけの行為でも、小心者は息を切らしてしまう。
「……公稜中出身、中原雪弥！」
机に握りこぶしを置き、恥ずかしいのを我慢して叫ぶ。
「勉強も運動も、生活態度も何もかも普通の俺ですが、たった一つだけ特技があります！」
そう、たった一つ。
「俺は、他人の“声模倣”が……できます！」

その瞬間の、場の静まりようったら。

面白そうにしているのは充だけで、あとの皆の反応は、あまり喜ばしいものとは言えなかった。
数人の女子は（何言ってんの、あいつ）と言いたげな目で俺を見ている。
数人の男子は、ばかばかしいと言いたげんに、顔を背ける。
「……」
俺は無言で充をにらみつけた。
お前のせいだぞ。
お前が人気者になるとか、言うから。
すると、
「……何だ？その声模倣って。もしかして人の声真似できるってこ

とか？」
いかにもお調子者そうな男子が、俺に問いかけてきた。
その瞳が、面白そうな輝きで満ちている。
「……うん、まあ、そうだけど」
でも、関心を持ってくれたのは、いいことだ。
「マジで！？」
少年は面白そうにパチンと手を打つと、俺の方へ顔を乗り出してきた。
「うっそ、じゃあ何かやってよ。あ、じゃあ、大川亜紀の真似とか！」
少年がそう言った瞬間、クラスにどっと笑いが起こった。
「おいおい、男じゃんかよ！」
げらげらと腹を抱えて笑う、クラスの男子。
絶対に、こいつらは俺がふざけてると思ってるんだ。
少し腹立ちつつも、自分でも馬鹿らしい特技だと思っているので、言い返せない。
「……大川亜紀って……」
今高校生の間で大人気の女性歌手だ。
確か「なつみかん」っていう曲が大ヒットし、その他のシングルもかなりいい調子で売れている今をときめく歌手だ。
もちろん、声ならわかる。
熱狂的なファンじゃないけど、ちょっと俺好みだから、
何度かテレビの中で探したことがあるので、歌だって知っている。
「……なあ、やってやって！得意なんだろ？」
その言葉に、少年たちは、また、笑った。
うーん、やっぱなんか馬鹿にされてる気はするけど。
まあ、いっか。
「ばっかじゃないの、男子。そんなん男の子に出来る訳……」
俺の隣の席の女子が口を開いたその時、
俺はすでに、実行中だった。

『……こ、こんにちは、大川亜紀です！』
教室に響いたのは、間違いなく“俺の”声。
皆が、一瞬にして静まりかえった。
よし、いける。
『私の新曲、“なつみかん”聴いてください！』
皆が、
一度俺から視線を背けた奴ら、すべてが俺を見た。
まるでとんでもない物を、みるような目だった。
そして、俺は、前の席の奴が一言、呟くのを聞いた。
「……マジかよ……大川亜紀にしか……聞こえねえ……」
「……っす、すごい……！」
一人の女子が、黄色い声を上げ、立ち上がった。
「……すっごい、中原君、だっけ！？超そっくり！ねね、次沢田拓海やってよ！ほら歌手の！
分かるよね！？分かるよね！？」
その言葉を筆頭に、今まで俺のことを同情的な眼差し
（きっと俺が大川亜紀の声を出すなんて出来る訳ないと思っていたに違いない）
を向けていた女子たちが、一斉に騒ぎ出した。
「……な、中原君！私、私、タイフーンの桜小路君が好きなんだけど、声やってくれない！？」
「私のためにＺ８の岡島君の声で喋ってー！！」
これじゃ、まるで俺の披露宴みたいだ。
確かに目立ちたかったけど、これは目立つ通り越して大変なことになってしまった。
……またかよ。
「……分かる、けどさ……」
「お願い！中原君！」

で、その子がかわいかったりすると、俺は調子に乗ってしまう人間で、
「……沢田拓海でいいの？」
「うん！！！」
で、そんなことを大喜びの笑顔で言われたりすると、更に図に乗って、
「え……ゴホン、
『今日は、皆来てくれてありがとう。今日は皆のおかげで楽しいライブになりそうだ！』
……と、こんな感じでいい？」
聞いちゃいなかった。
さっきの女の子は喜びに満ちた黄色い悲鳴を上げている。
「……本当そっくり……！！かっこいいよね……拓海っ！！」
一応、言ったのは俺なんですが。
「……次私！！！ＴＡＴ＝ＴＵＮの青山君やって！！」
「何言ってんのよ！中原君、次は瀧川秀樹君お願い！」
「女子どもふざけんな！中原、次は男のために小原優実ちゃんで！！」
……やばい。
それぞれがお互いの意見を言い合い、もうＨＲどころではなくなっている。
初めのうちは静かにさせようとしていた先生も、後半からどうしようもなくなりおろおろとしている。
熱血教師が台無しだ。
でも、こんな状況になったのは、もとはと言えば俺のせいで。
どうにか、俺がこの場を取り繕わなければ。
そして、俺が考え考え考えたことは、
「……充、逃げるぞ！」

とにかく、逃げろ。
俺は充の腕を引っつかむと、ざわつく教室から飛び出した。
ごめんなさい、先生……！
平凡な高校生の俺には、騒ぎの止め方がわかりません！
「……ちょ、ちょっと待ってよ中原君！Ｚ８の岡山君の声やってよ！」
「しつこいぞ女子！中原は男子なんだから小原優実ちゃんの方がいいに決まってんだろ！」
言い争う、男子と女子。
もう、そういう問題ではなかった。

「……っご、ごめんなさいいいいい……！！」
俺は叫びながら、騒ぐ教室から逃げ出した。

「ねえねえ、このクッキーどうかな？美味しい？」
ここは家庭科室。
今ここでは二年生の女子生徒が、調理実習の授業を受けていた。
「うん、美味しいよ。あ、私のも食べてくれる？」
「僕が食べよっか？」
突然の、可愛らしい声。
少女たちがその声に驚いて振り向くと、そこには小柄な少年の姿。
おそらく身長は１６０もないだろう、ぬいぐるみのような愛らしい容姿の少年である。

（……かっ……可愛い……！）
少女たちの心は一気に打ち抜かれ、母性本能を刺激する。
「……い、一年生？」
少女たちが笑顔で問うと、少年は照れ笑いを浮かべる。
「嫌だなあ、僕、もう三年生だよ？」
「……！」
さすがにこれには驚いた。
「……っす、すみません！ため口で……！！」
「大丈夫だよ。それより……これ、もらっちゃ駄目かな？」
コマーシャルのチワワを沸騰とさせる小動物的な大きな瞳を輝かせて、少年は笑った。
もちろん、あげるに決まっている。
「……も、もちろんですよ！ぜひぜひぜひ、貰ってください！」
あまりの可愛さに冷静さを失いそうになりながらも、少女は少年にクッキーの箱を差し出した。
「……ありがとうっ！」
にこり、と微笑む少年。
今なら、死んでもいい！
少女たちの思いは見事にはもった。
「……ん、じゃあありがとう。バイバイ！」
少年は小さな手をひらひらと振って、少女たちから離れて行った。
彼女たちの頭には、何故授業中に彼がここに来れたのか、なんていう質問は、まるっきりなかったに違いない。

少年は、貰った白い紙の箱を開けた。四つほど入っていた。
「……さ、早速食べようっと」
余韻に浸ることもなく、顔に似合わず乱暴に包み紙を破り捨てると、そのクッキーのうち一つを手にとって持ち、口に入れた。
口の中に広がる、甘い感覚。
普通なら、十分美味しい部類に入る。
だが。
「……何、これ」
少年は、さっきまでの愛らしい表情からうって変わって、深く顔をしかめる。
「……何これ。不味いじゃん。何美味しいような素振りみせてんの？」
少年は険しい顔のまま立ち上がると、
「……要らないや、こんなの」
バサ、バサバサッ。
ゴミ箱に、その残りをすべて、放り込んだ。
銀紙に包まれたクッキーは、無残にゴミ箱の中で汚い紙くずと混ざった。
「……あんなの、違う」
少年は、呟いた。
「あんなの、“可奈”のじゃない。可奈のじゃなきゃ、駄目なんだ」
拳を握り締め、唇をかみしめる。
「違う、違う……！」
「……満足しましたか、先輩」
ふと、少年の背後から、低い声がした。
少年は顔を上げなくても、その人物が誰なのか、分かった。

「……あ、駿。どうしたの？俺のこと、迎えに来たの？」
「……まあ、そうです。
忍先輩が、『もうそろそろ女のとこ行ってお菓子もらって捨ててる頃だから、探して来てよ』……と」
「……あははあ」
少年は、やはり先ほどとは違う可愛らしい顔で、くすくすと笑った。
「やっぱ、忍は俺のことわかってるね。
でも、どーせ忍だって、もうそろそろ女の子をめったためたに振る頃だと思うよ。　俺だって知ってるもん」
駿、と呼ばれた少年は、ため息を吐いた。
「……そんなことより、行きましょう、美琴先輩。会長が呼んでます」
「うん、そうだねえ」
少年は嬉しそうにぴょん、と机から飛び降りた。
「さ、行こっか」
「はい」

そして、二人は歩き出した。

「……そういえばさあ、駿、知ってる？」
「何ですか？」
「んっとねー、ただの噂かもしれないんだけどお」
美琴、と呼ばれた少年は、顎に手をあてて考え込む可愛らしい仕草をする。
「……実は、噂で聞いたんだ。何でも、一年に、“声模倣”できる子がいるんだって」
「……声模倣？」
「うん、んでー、響が、その子のこと探してるって。どうしても会いたいって。
ぜひぜひ、うちの生徒会へ入ってほしい、ってさ」

人生って、何が起こるか分からない。
人間の人生って、何が左右するのか、分からないもんだ。
少なくとも、中原雪弥には、まだ。

第一部～今迫る、聖倫の真実～（後書き）

始めまして、藤碕篤綺と申すものです。
この拙い小説を読んでくださった方、本当にありがとうございました。
今のところ男ばかりでむさくるしいですが、ちゃんとヒロインの女の子も登場するので、よければその辺り期待してやってくれると嬉しいです。

第二部～衝撃、生徒会長の作戦～

生徒会会報！第二部～衝撃、生徒会長の作戦～

「……で、逃げられたみたいだな、なんとか」

ぜえぜえと荒く息を切らす俺に、充がけらけらと笑いながら言った。
こいつ、よく笑う余裕なんてあるな。
俺なんか疲れきっているのに。

「逃げられなきゃ……困るよ……」

実はこんな経験は、何も今日始めてのことじゃない。
中学の頃通っていた塾で、充が俺の力のことを、仲のいい連中に振れ回ったのだ。
お陰で俺はその日、男子生徒のリクエスト攻めに合い、帰宅したときにはもう夜八時を回っていた。
授業が終わったのは七時だったのに。

「……はああ……やっぱ言わなきゃよかった……」
今更落ち込んでも、もう遅い。

「仕方ねえよ。言ったもんは遅い。あきらめろ」
分かっていることを充に言われ、更に落ち込む。

「……あーあ、」
大きくため息を吐き、廊下を歩き出した。
ああ。
外は、こんなにいい天気なのに。

失敗したなー……
「おい、雪！雪って！前見ろ！」
無理無理。
俺にはもう、前は向けない。

どうせ俺は、明日から「オタクっぽいキモい奴」って呼ばれるんだ。

「聞いてるのか！？ぶつかるぞ！」
俺は、もう、いろんなものにぶつかって……
え？
ぶつか？

そう思って、気づいた時には、もう遅く。

強烈な、衝撃。

誰かの頭が見え、そしてそのまま俺の意識は暗転した。

い……うぶ……
ああ、誰かが何か言っている。
誰だろう。
ていうか、俺どうなったんだっけ？
訳が分からない。

……ようぶ？
誰か、喋ってるのか？
誰だ？

俺は瞬間的に、体をがばりと上げた。
どこだ、ここは？？

霞む、視界。
なのに、体は温かい。
俺は、夢でも見てるのか？

「……大丈夫？君」
次こそははっきりと、聞こえた。

柔らかで可愛らしい、女の子の声。
……。
って、……お、おおおお女の子！？

「うわあっ！」
顔を真っ赤にして、素早く体を離した。
恥ずかしい。
もしかしなくても俺は、この女の子にぶつかったんだろうか。
だから、暖かく感じたのか。

というか、その子が俺に膝を貸してくれたのか……。
こんなときにそんな場合じゃないだろ、と思いつつも、口元が自然ににやける。

「……す、すみません……」
そう言って振り返り、俺は絶句した。

「いいのいいの、私もよそ見してたし、気にしないで、ね？」
そこに居たのは、超絶美少女。

身長は見たところ１５０と少しくらい。
少々茶色に染まった髪に、ぎりぎりの長さのスカート丈。
小柄な割にスタイルがよく、まるでファッション雑誌のモデルのようだ。
派手な印象を受けなくもないが、とにかく美人には変わりない。

「……！」
一瞬にして、違う意味での衝撃。

まさか。
俺はこんなに可愛らしい女の人に頭からぶつかっ・・・・・・

「……ごっ……ごめんなさい！ごめんなさい！」
必死で頭を下げる。
どうしよう、顔に傷がついたら。
お嫁にいけなくなる。
それなら俺が貰いた、って、何考えてるんだ俺は！

「え、そ、そんなに謝らなくても、大丈夫だよ？ほら、私はこのとーり」
立ち上がって、両手をぶんぶんと振る。
「ね？」
ね、って。
可愛すぎるんですけど……！！
「……す、すみません……」
「大丈夫だって！それより君こそ大丈夫？しばらく倒れてたから……」
恥ずかしい。
まさか、女の子の前でそんなみっともない姿を。
「大丈夫です！」
突然、叫んだ。
「全然、もうぜんぜん大丈夫っす！
あんなん、豆腐にぶつかるくらいなんともありません！」
充が隣で、しらけた顔をしている。
顔が明らかに、「調子よくしやがって」と、訴えている。
「そう、それなら、いいけど……」
少女は笑い、スカートのすそを払いながら立ち上がった。
「……あ、あの」
「もう謝らない！私は全然大丈夫だから！……優しいね、君」
そう微笑まれて、俺が冷静でいられる筈もなく。

「……っ、え、や、優しいなんて……っ！」
顔を更に真っ赤にし、手が千切れんばかりに否定する。

「あ、君、一年生なんだ」
そんな俺を見ているのかいないのか、少女は俺の上履きに目を落とし、呟いた。

え？
「……あ、はい、そうですけど……」

だから、何なのだろう。
そこでふと気づいたのだが、目の前の美少女の上履きの色は、自分たちと違っていた。

ああ。
先輩、か。

二年か三年かまでは分からないが、
自分たちとカラーが違う以上、同い年では同い年ではない。

「あ、やっぱり！」
少女……いや、先輩は、嬉しそうに手を打つと、俺ににっこりと笑いかけ、

「ねね、じゃ、さっきのお詫びと言っちゃあれなんだけど、よければ、人探し頼まれてくれない？」

人、探し？

誰を探しているのだろうか。
まさか、恋人、という嫌な予感は消し去って、弟だ、と思うことにする。

「……は、はい。それで、誰なんですか??」

「……んとねー、名前は分からないんだけど、」
少女は悩むようなしぐさをし、そして、言った。

「なんか……今年ここに入った一年生で、人の声真似ができるっていう変わった男の子がいるらしいのよ。その子を探して、見つけたら、こう言っておいてくれない？

“会長が、待ってる……”って。」

一瞬、ブレーカーが飛んだ。

彼女は今、なんと言ったのだろう。

声真似ができる、一年生。
男の子。
会長が、会長が、探してる……

それは、間違いなく、俺のことだった。

「……！」
「お、おい……！」
横で充も、驚いた声を上げる。

俺が、
俺、なんかが……？
一瞬のことにくらくらして、信じられない。

「……え……？」
「だよねえ、やっぱそんな人いないって思うよねえ。私も思ったよ。でも会長がね、間違いないって。絶対にこの学校に入学してきたって。彼はうちにとって大事な人手だから、丁重にお出迎えしなさいって。」

そこじゃ、ないんですよ。

「ありえないよね、そんな変わった子」
いえいえ、貴方の目の前にいますよ？
俺がうろたえているのは、そんな摩訶不思議な人間（＝俺）のことではなく、何故俺が会長などというすばらしい人物（多分）に目をつけられているのかということで。

「え、えええええ……」
どもったあまり、相槌が長くなってしまった。
「でしょう？まあ、とにかく、会ったら私に教えてね。あ、私は大抵いつも、生徒会室にいるから、見つけたら伝えに来てね。じゃあ、また」

少女は愛想よく手を振って、俺から離れていった。
ああ。
俺の運命の出会い。

「……なあ、雪」
充が、後ろで呟いた。
「……え？」
「あの女の子、お前を探してるんじゃねえの？」
充の、当然の言葉。
「なら、何で言わなかったんだよ。さっき言っておけば、お前今頃、あの可愛い先輩と今頃二人で廊下歩けたぞ」
……そんなこと、考えてなかった。
「そう、だ……！」
俺って、馬鹿だ。
「何で、言わなかったんだよ？」
そんなこと、言われても。
「……なんていうか……言葉が出てこなくて……やったラッキーって思ったんだけど、なんか言い出しにくくて……」
「おいおい……」
充はあきれたため息をつき、肩をすくめた。
「んなんだから、お前は振られるんだよ」
ザクリ。
言葉の暴力が、俺を突き刺す。
「う……」
「まあ、仕方ないって。それがお前の運命だって。お前は女縁がな

いんだよ。あきらめな」
そういわれて諦められたら、どんなに楽だろうか。
「……」
「ま、今のはいい思い出にして、忘れようぜ。一年にも可愛い子の一人や二人いるって。落ち込むな。ほら、もうそろそろ教室戻ろうぜ。もうすぐ入学式だ」

充になだめられ、しぶしぶ立ち上がる。
ああ。

俺の高校生活は、

どうも、順風満帆とは、言えなさそうです。

＊

『今日、桜も満開なうららかな日に、我が聖倫学園の門をくぐり入学してきてくれた、２００名の一年生諸君には、この学校での目覚しい活躍と、すばらしい栄光を期待し……』

校長が、もっともらしい言葉を俺たちにかけているが、こういうとき、大抵興味深く聞いているのは親御さんだけで、当の本人は耳を傾けちゃいないんだ。
そして、俺も。

今は、襲ってくる睡魔と闘うので精一杯状態。
隣の充なんか、もう十分も前に、眠りについている。

のう天気な奴だ。
形なりにも、起きているふりを保とうとしている、俺の面目がない。
ああ、くそお、眠い。

『……以上で、話を終わらせていただきます』
髭が暑苦しそうな校長先生が俺たちに向かって礼をし、ステージを降りていく。
やった。

終わった。
ようやく眠らなくて済む、とこっそり安堵の息を吐いた。

……そして、俺は、本当に我が目を疑った。
顔を上げた自分の視線の先に、見えた人物。

小柄で茶髪、ぎりぎりなスカート丈、男ならみとれずに居られないルックスの美少女。

その子は、
『次は、生徒会長から、一年生の皆さんへの祝辞です』

マイクをまるで今から唄を歌うアイドルのような格好で持ち、語尾に『ハート』でもつきそうな乗りで、そう、言った。

まさか、あの人……！

俺に、考える時間はなかった。

「きゃあああああああああああっ！」

少女がそう宣言した瞬間、二三年生の方から、かなりの数の女子の黄色い声が、俺の思考をかき消した。
あまりの大きさに、隣で眠っていた充も、がくんと体ごと沈み、そして起き上がる。

「……っんな……なんだよこの声！」
無理やり起こされた充は、怒り気味に叫んだ。
しかしその叫び声さえも、女子の黄色い悲鳴に遮られ、聞こえない。

「わ、わっかんねえよ！」
あの子が、会長の名を出してからだ。
背後からは尚も、女子の声が聞こえる。

「響様……！愛してるー！！！」
「早くお声を聞かせてー！響様――！！！」
「ああ……このときを待ってたの！」
「そのお声を聞ければ……もう死んでもいい……！」

なんだ、これ。
あまりのことに、俺と充含む一年生は、呆然とするばかり。

『皆さん、落ち着いてください！』
ああ。
彼女、かわいいなあ。
マイク越しに叫ぶ声が、ほんのかすかに聞こえた。

しかしそれでも、なかなか一旦火のついた女子は止められない。

いかん。
耳が、キンキンしてきた。

『皆、静かにしてっ！！！』
マイク独特の、キインという金属音と同時に聞こえる、彼女の叫び声。
さすがに今回ばかりは聞こえたのか、皆が一瞬でしいん、と静まり返った。
「……」
充は呆然として、何も言えずにいる。それはもちろん、俺も一緒。
「「何なんだ……この学校……。」」
思わず、隣の充と同じタイミングで呟いてしまった。
すさまじいこの熱気は、一体。
入学したての一年生全員がぽかんとしている中、彼女の可愛らしい声が響く。
『……えっと、はい、気を取り直して、会長のご挨拶です』
心なしか、彼女の声はどこか疲れているようだ。
無理もないかもしれない、あのうるさい女子集団を静まらせたのだから。
可哀想に。俺が止めてあげられれば……！
自分の無力さを一人かみ締めながら、俺はステージに視線を移した。
そして、絶句した。
「……！？」
……カツッ。
靴底を蹴る音が体育館中に響き渡った。
一年生全員が、その音の主を振り向き、見る。
『……おはようございます。生徒会長の、響です』
それは、少年だった。

学年は間違いなく三年生、身長１７０とちょっと。聞くだけで惚れ惚れする低すぎず高すぎない麗しいアルトボイスに、引き締まって無駄のない細身の体、切長の茶色の瞳、美しく整えられた制服、そして何より、

『今日、この第５４回聖倫学園高校入学式を無事に行えたことを感謝しています』

その、王子様的、と言うのにふさわしい、驚異的な美貌。

「きゃあああー！響様―！」

「いつ見ても素敵―！」

「ああ……こちらを向いて欲しい……」

再び、体育館を悲鳴が呑み込んだ。

「成る程、なあ……」

隣の充も、俺も、もちろん他の一年生も、皆、その声援の意味に気づいたのだ。

「会長が美形さんだから、女の子のアイドルになってるわけね」

充が実に簡潔にあっさりと、しかし的を射た答えを発した。

「……そう、だね……」

最早、ただただ納得し、頷くことに終始するのみだ。

『苦しい受験を乗り越え、今日君達がこの聖倫に入学してきたことを、大変嬉しく思います』

女生徒が騒ぐのも、理解できる。

男性といえど、男臭さを感じさせないその美貌と、妙な清潔感と、清廉された雰囲気は、女の子のみならず男も……って何考えてるんだ俺は。

『これから、勉強やスポーツ、校内行事等、様々なことがこの学園で待っています。皆さんもこの学園での三年間を、思う存分楽しんでください』

言うこともまた素晴らしい。
『それでは、これで僕の話を終わらせて頂きます』
「えええーっ！！！」
そして話を終えようとした瞬間、案の定女子生徒から不満の声が上がる。
大変だなあ、人気っていうのも。
俺はしみじみと実感していた。
ところが。
『……あ……すみません。一つ、話し忘れていたことがありました』
舞台から立ち去ったはずの会長様が、いつのまにか申し訳なさそうに、再びステージ上に立っていた。

まあ、女子生徒にとっては喜ばしいことなのかもしれないが。
「……？何だろ？」
「さあ？」
言い忘れたことなら、後で放送でも流せばいいじゃん、とごく普通の公立高校生は思って会しまう。
「放送かなんかにすりゃあ、いいのに」
隣で充も、俺と同じ考えだったようだ。
「だよな、俺は早く教室に帰りたいよ」
俺は軽くため息をついて、椅子の背もたれに背中をくっつけ、体制を緩めた。

「……実は、この学校では、『生徒会補佐』を募集しています」
生徒会長の言葉が、俺の耳を流れて抜ける。
「正式な生徒会役員とは別に、この学校は生徒会活動が盛んで多忙なため、一年生から一人、生徒会室内での庶務や簡単な報告等をする『右腕』候補を募りたいと思います。参加資格等は特にありません。やる気がある一年生の諸君は、明後日の放課後、『右腕』適正面談をしますので、四階会議室まで来てください。特に、」

すごいなあ。
中学時代も、同じクラスから絶対立候補する奴がいた。
大抵そういう奴は、頭もよくて、運動神経も抜群で、基本的にクラス委員長とかを務めているような、パーフェクト人間だった。
そりゃあ俺も一度くらい憧れたけど、取り柄も何もない一般人には、所詮生徒会なんて無縁の話だ。
多分、その生徒会補佐って奴を希望する人は、皆すごいものを持ってるんだろうなあ。
もしかしたら……会長目当ての女子もいるかもしれないけど。
とにかく、すごいなあ。
そんなことを、ぼおっと考える。
急に眠気が襲ってきて、思わず欠伸をする。

「……『声模倣』の能力を持つ、と噂の男の子が、いるそうなのですが、もしいたら、
来てください。待っています』
そうか。声模倣かあ。
きっとすごいんだろうな、そいつ。
きっと頭も運動神経も、おまけに顔もパーフェク……え？
今、会長の口から聞いた単語を思い出し、我に返った。
何……
何て、言った？
「おい……雪弥……」
隣に座っている充の声は、心なしか、震えている。
「どうすんだよ……お前……？」
「え、な、何が？」
まさか。
いやいや、まさかそんな筈。俺の聞き違いだ。きっとそうだ。うん。
しかし充は、俺のそんな思いを、あっけなく打ち砕いた。

「……お前、全校生徒の前で、会長様から、直々にお呼びくらったんじゃねえか・・・！」

ああ。

やっぱり、聞き違いじゃあ、なかったんだ。

『特に、声模倣の力を持つ男の子のこと、待ってます』

「……冗談、だろ……？」

さて、俺はこれから、どうなるのでしょうか？

神様仏様、生徒会長様。どなたか、教えてください。

＊

「……で、どうしたの？全校集会さぼってまで、こんなとこ呼び出して」

風が、少年の背中を吹き抜けた。

太陽はかすかに雲に掛かり、少しだけ明るさは消えている。

それでもまだまだ、時間は午前。

「そんなに、俺に話したいことでも、あった？」

風に揺れる髪をそのままにして、まるで風と戯れているかのように、少年は薄く笑った。

「……山浪君って、意地悪なんだね」

ふわりと宙に浮きそうになるスカートを押さえながら、少女は俯いた。

「普通、貴方ほどの人なら、分かると思うんだけど」

「うん、分かるよ。だから言って」

嫌味のない、穢れなき微笑み。

だからといって彼は、ただこの空気を淡々と受け入れている訳ではないのだ。

「……好きなの」
少女の、言葉。
「知っているでしょう？私が山浪君のこといつも見てたこと。私が……いつも貴方のことを視線で追っていたこと、知らないわけじゃないわよね？」
風が、少し強まる。
「……うん、まあね」
「じゃあ！」
はっきりしない少年に、しびれを切らしたかのように、少し荒い口調で少女が詰め寄った。
「じゃあ……何か返事してよ。私のことが好きとか、嫌いとか、付き合ってもいいとか悪いとか！」
「……そういうことって、あんまり考えたことないんだけどなあ」
口調だけは困っている風に、しかし顔は、相変わらず面白そうな笑みのままだ。
慣れっこなんだ。
少女でなくても、誰だって分かる。

少年は、背中を屋上の鉄柱に押し付けると、目を閉じて呟く。
「……いいよ？別に。付き合っても」
「ほ、本当！？」
あまりにも、予想外の答え。
めちゃめちゃに振られるか、あっさり断られるか……というより、成功例を全く『考えていなかったのだ……のどちらかしかないと思っていたのだ。
「うん、いいよ」
そして、微笑む。

「その代わり、」

「俺のどこが好きか、百箇所言ってみて」

「……え？」

ぽかんとする、少女。

「意味分からなかった？もう一回言おうか？だから、君が俺のどこが好きかを百箇所言えたら、君と付き合う。それでいい？」

面白そうに、尚も笑う。

「そんな、いきなり……！」

「思いつかない？なら君の思いはその程度なんだ」

悪気のない、笑顔。

この男は、楽しんでいる。

少年を愛し、ずっと見つめてきた少女だからこそ、この男の性格の悪さは知っていた。

人の思いを、たいしたものと思っちゃいない。

自分が真剣な時に、平気で横槍を入れる。

それでも、訳もなく、目が離せない。

「ねえ、言って？」

薄く、笑う。

「……え……えっと……ま、まず……頭いいし、生徒会もやってて、しっかり者だし、あとは……あ、えっとそうだ、授業をきちんと……」

「もういいや」

あまりにも我儘に、少年の言葉は少女の言葉を切り捨てる。

「結局、君、俺のこと何も見てないんだね。正直に俺の顔に惚れました、って言えば？正直に、山浪君は顔も頭も運動神経も完璧で、

マジかっこいーからです、っていやあいいのに。馬鹿だね、君、結局君はさ、俺のこと愛してないんだよ、きっと」
少女は、力が抜けた。
訳の分からない悲しみと、空しさが、全体を駆け巡る。
「……っ……」
気づいたら、涙が零れていた。

「……じゃあね、バイバイ？」
少年は、少女の顔も見らずに手を振ると、屋上のドアを開け、三階へと降りていった。

「……ああ！忍発見っ！」
三回の廊下に右足を下ろした瞬間、右側から自分の名前を大きな声で呼ぶのが聞こえた。
もちろん、声の主はよく知る少年だ。

「あ、美琴。と……駿」
「やっほー。忍があまりに遅いからさあ、様子見に来ちゃったよ。やっぱり忍、女の子を冷たく振ってたね、僕の思った通り！」
「忍先輩、とりあえず響会長が呼んでいたので、すぐ生徒会室に向かうべきです」
常時明るいテンションの小柄な少年とは対照的に、背の高い少年は、落ち着き払った態度で少年の名を呼ぶ。
「行きましょう、忍先輩……いや、忍副会長、ですか？」

「だね」
少年・忍はこの男特有の含んだような笑いを向けると、二人と連れ立って歩いていった。

第二部～衝撃、生徒会長の作戦～（後書き）

やっとキャラが出揃いました。
頑張って書きたいです。

第三部～驚愕、生徒会の素顔～

生徒会会報！　第三部～驚愕、生徒会の素顔～

「……ど、どうしよう……」
俺は、隣の充に、生気を失くした声で漏らした。
やばい。
あまりに大きな出来事のため、俺一人では冷静な判断ができそうにもない。
きっと俺よりも大人っぽい充なら、俺の気持ちを汲んでくれるはず。
そう思っていたのだ。
そうだ、きっとそうだ、充はきっと俺の不安な気持ちを分かってくれ
「……やってみりゃあいいじゃん、生徒会」
俺の期待に満ちたまなざしを華麗にスルーし、充が笑顔で告げる。
「やってみろよ、何事も挑戦ってやつだ」
「……そんなあ……」
嘘だ。嘘でもいいから、お前に生徒会なんて無理だろ、止めとけって言ってくれ。いや嘘じゃ困る。でも嘘でもいい。……ああ、もう、訳が分からない。

ほんの、一時間前。
俺は、全校生徒の真ん前で、聖倫学園の麗しき生徒会長様に、名づけて『生徒会に入ってくれたら嬉しいんだけどなあ』宣言を受け、今に至る。
ちなみに断っておくけど、俺は生徒会長直々に名指しされるほど優等生でもないし、人望もないし、しっかり者でもない。
ただ、『一度聞いたものの声を真似ることができる』という、奇妙

としか言いがたい能力を持っている、あとはごくごく普通（成績からスポーツテスト、身長体重から容姿まで）の高校一年生だ。
中学時代教科書をなくし、財布を落とし、解答欄を間違えたために公立に落ち、彼女にまでふられ泣く泣くこの私立聖倫学園にやってきた、ただそれだけの俺を、
あんなに女性にモテモテで、頭脳明晰容姿端麗を絵にしたような生徒会長様が、皆の前で探すよう依頼してまで、俺を生徒会に欲した理由が、未だに分からない。
しかも、会長は言った。
『一年生で、声模倣の力を持っている男の子を、捜しています』
はっきりと、俺の奇妙な特技の名を、呼んだ。
あんな下らない、少々オタクっぽい、失敗すれば激しく引かれるような力を、何故会長は探そうとするんだろうか？
持っている本人（＝俺）が分からないのでは、どうしようもない。
しかも、俺の不安を助長させることには、会長の思召しを聞いた会長ファンクラブ（多分）の先輩（無論女子）が、自分が会長の探す人を見つけ出して会長とお近づきになろうと、俺、もとい『声模倣の能力者の男の子』を、血眼になって探し回っているのだ。
クラスの奴に、既に力をばらしてしまった俺は、なんとかクラスメイトに頼み込んで、俺のことを言うのは辞めさせた。だが、問題は先輩方だ。
捕まったらどうしよう、会長に知られたら、と思い、休み時間はトイレに行くのも慎重にする。
頼みの綱の充は、あんなだし。
うう、どうしよう。腹が痛くなってきた。
「……まあ、お前は嫌がるかもしれないけどさ、俺はやってみるべきだと思うぜ、本当。
せっかく会長様からお呼ばれされたんだぜ？」
お、お呼ばれ……。
「それにほら、昼休みに適正面談するって言ってただろ？だからお

前が生徒会なんてできそうもないってことが分かったら、補佐なんてならなくていいんだよ。俺が言ってるのはさ、せっかくだし生徒会長に顔出しぐらいして来いよ、ってこと。誰が見てもお前が生徒会なんてできそうにないことぐらい分かるしさ、一応だよ、一応」
そこまで言われると、何だか悲しい。
「そ、それはそうだけど……」
「なあに、不安がることねえって」
充が笑う。
ああ、今日の充の笑顔は、いつもと違ってとっても怖いよ。
「……で、でも、も、もし入ることになったら！」
「大丈夫だって、お前なら絶対選ばれない」
だから、そこまで言われると悲しいよ。
「……でも……」
やっぱり、不安だ。
まず、俺はあんな人気者の生徒会長と顔を合わすことすら緊張するのに、それで面談？会話？ああ、考えただけで倒れそうだ。
凡人が、アイドルと対峙したときの感覚だ。きっとそうだ。
充は自分とは関係ないからって楽しそうだけど、俺の気持ちを少しは考えろ。
「……本当は、お前、ちょっと嬉しいんじゃねえの？」
充が、パンをくわえたままそう言った。
「……う……」
実は、図星なのかもしれない。
確かに、嬉しくないと言ったら、嘘になる。
今まで何の変化も段差もない平凡な人生を歩んできた俺にとって、突然の生徒会への誘いは、驚きと不安半面、実はとてもわくわくしている自分も、いる気がする。
もしかして、俺は変われるかもしれない。
あんなすごい人たちに認めてもらえれば、平凡な俺から、今まで自分も見つけられなかった俺に出会えるかもしれない、なんて。

思っちゃったりしなくもないけど。
でも、やっぱり小心者の俺は、自分の中に芽生えた好奇心と期待より、不安と恐怖を優先してしまう。
「ま、まあ、そうだけど……」
「なんだ、それなら話早いじゃん。やってみろよ？」
「そんな、簡単に言うなよ……。だいたい、お前生徒会ってものがどんなに大変か知ってんのか！？前項集会で司会やったり、清掃活動したり、行事のたびに借り出されたり……！」
俺だってろくに知りもしないくせに、充に訴えても説得力ないかもしれないが。
「……ああ、じゃあこういうのは？」
充は俺の言葉に少し考え込む仕草をみせ、そして、ナイスアイディア、と言わんばかりに両手を打ち、
「お前が生徒会にめでたく入ることになったら、俺も執行委員になるから。それでいいだろ？」
「……は……？」
突然の言葉に、呆れて声も出ない。
何、言ってるんだ、この目の前の充君は……？
「だろ、いいと思わないか？そしたら俺も生徒会っつうか執行部の大変さ分かるし。お前の気持ちも分かるし、いいだろ？」
なんで、俺が生徒会に入ること前提なんだ？
そして、俺が面談で右腕落選したときの考えはないのか？
さっきと言ってる事１８０度違わないか？
でもどうせこいつにそんなことを言ったところで、「お前の気持ちを代弁してやったんだぜ」とか、はぐらかされるに違いない。
この野郎。この気変わり魔。
俺は、目の前が真っ暗になりそうだった。
「な？頼むよ、ていうか頑張れよ、雪耶。お前ならできる、絶対できるから、な？」

そんなことを延々十分も言われ続けて、俺はついに、頭を下げてしまった。

＊

「……遅かったね、会長が怒るよ？いや、怒るっていうより、困るかな」
生徒会室に遅れて入ってきた三人の少年に気づき、男は苦笑いを浮かべた。
「響（ひびき）は優しいから怒ったりしないもんねーｖね、駿？」
明らかに高校生とは思えない外見をした少年は、隣にいる長身で落ち着いた雰囲気の少年に、同意を求めた。
首をかしげるその様は、まるでぬいぐるみのように愛らしい。
「……え、あ、ああ、そ、そうですね……」
唐突にそんなことを聞かれて当惑した少年は、形ばかりの返事を返す。
「それより、」
男は、そう呟き、そして背の高い少年と小柄な少年の間に立つ、非常に整った顔の少年をちらりと見て、そして指差す。
「……お前もいたとはな、二度とお前の顔なんて見たくなかったが」
「お前は酷いと思うよ、千歳」
“お前”と呼ばれた少年――――忍は、男に対していつもと変わらぬ、穏やかで、しかしどこが全てを見透かしたような笑みを見せた。
「……美琴、」
千歳、と呼ばれた男は、その言葉が聞こえていないかのように目をそむけ、小柄な少年に声をかける。

「生徒会会報！　第三部もうそろそろ、廊下に出ようか。『右腕』候補が来ているかもしれないし。先に行っててくれ。俺はこの仕事を片付けてから来るから」
「分かったー、じゃあ千歳も後で来てね」
そう言って、小柄な少年・美琴は、嬉しそうに鼻歌を歌いながら、忍は、いつもと同じような掴み所のない笑顔を浮かべたまま、部屋から出ていった。

無機質な、ドアが閉まる音。
「……千歳さん」
長身の少年・駿は、数秒の間閉まったドアを見つめていたが、やがて隣にいる男の名を呼んだ。
「……っ……くそっ……！」
男・千歳は、二人が出て行った途端、その背中が吸い込まれていったドアを憎憎しげに見つめ、窓ガラスに拳をたたきつける。
「……っ……畜生っ……、忍の野郎……！」
爪が拳に食い込み、赤い筋となって血が流れたが、そんなことに気を取られることもなく、ただ瞳を憎悪に輝かせる。
「落ち着いてください、千歳さん。今日は、『右腕』候補が来る日ですよ」
駿は、冷静に男に言い聞かせる。
「……知ってるよ、んなこと……」
「知っているなら、落ち着いてください。さすがに忍さんも、今日は」
「俺は、いつでも落ち着いてるさ……！」
まさか。そんなことあるわけない。
駿は思ったが、あえて口には出さずにいる。
今この状態の彼に反対意見を述べることは、自分にとっても彼にとっても不利益だ。

「……千歳さ、落ち着いて……」
「……なんだよ、その瞳は」
顔を上げた千歳の目は、憎しみの焔が灯っていた。
駿の眼差しを否定的に受け取ったらしく、駿に近づいて吐き捨てる。
「……んだよその顔は！下らないって言いたいのか！？あいつに女を取られたってだけであいつを憎む俺がそんなに哀れか！？馬鹿みたいかよ！？んだよ、それは……！」
「違います……！俺はそんなこと、決して思ってな……」
瞬間。
駿の頬を、何かが思いっきり殴った感覚があった。
その感覚だけで駿はスローモーションのように床へと崩れ落ち、息を荒くつきながら、頭上の男を見上げる。
切れた頬を拭うと、掌に赤い線の跡が残った。
「……生意気なんだよ……お前は……！」
千歳は、唇を噛み、抵抗しない少年の体を、蹴りつけた。
「……お前は……俺の言うことだけ聞いていればいいんだよ……！余計なこと考えるんじゃねえ……！！！」
男は険しい形相でそう吐き捨てると、もう一度少年の制服の端を踏みつけ、踏みにじり、そして荒い足取りで部屋から出ていった。

「っ……」
少年は誰もいなくなった部屋で一人起き上がり、制服の汚れを払った。
切れた唇の端を拭い、血液を止めようと試みた。
なんとか血の跡は隠せたので、あとは埃を払い、靴跡のついた制服をブラシで撫でる。
「……千歳さん……」
そして、呟く。

決して本人には届かないけれど、それでも、駿は言いたかった。
たった、一言。

「……千歳さん……貴方は……」

貴方は今、幸せですか？

第三部～驚愕、生徒会の素顔～（後書き）

次も頑張ります！
これからもキャラが増えてきそうです。

第四部～感動、暖かな気持ち～

生徒会会報！　第四部～感動、暖かな気持ち～

そして、昼休み。

俺は、充に進められるままに、生徒会室の前に置かれた椅子に腰掛けていた。
多分、ここから一人一人生徒会室内部に呼び、面接するつもりだろう。
生徒会の人は気付かないかもしれないけど、廊下で待たされるってのは、結構寒いんだぜ。
結構早く来たつもりだったのだが、生徒会長パワーは俺の想像より更にすさまじく、既に俺の前には数十人の女子。
やはり美形は一年生にも通じるらしい。
ちらほら男子も見受けられるが、彼等の意図はおそらく俺を探していた可愛い先輩だろう。
ったく、誰もまともに学校のこと考えてねえなとつっこもうと思ったのだが生憎俺も彼等とほとんど大差ない。
……でも、女子は皆割と可愛くて、スカートも短めで、俺的には結構嬉しい……て、違う。違う違う。何考えてるんだ俺は。
全部この子達は会長目当てで来てるんだから。余計なこと考えるな、俺。

間違っても俺に会いに来たわけじゃないんだぞ。無駄な妄想は悲しみを呼ぶだけだ。
「……緊張してんのか？雪弥。大丈夫だって、お前はきっと生徒会に入れるよ」
さっきと言ってること１８０度違うんですけど、充さん？
「……うそだあ」
思わず、充につっこみを入れてしまった。
「本当だって、俺を信じろよ」
笑いながら言う男を、信じられるわけないだろ。
「……だいたいさあ、いくらここの女の子達が会長目当てだって言ってもさあ、皆ある程度のすごいもん持ってるんでしょ？
なら俺のあんな力なんて、全然たいしたことないんじゃないかな？
会長だって他にもっとすごい人がいたら気い変わるかもしれないよ？」
「そうかな、俺はそうとは思わないけど。お前の能力ほどすごい奴って滅多にいないぜ。
だってほら、お前の力って、カラオケとか、宴会とか、パーティーとかさ、色んな用途で使えるじゃん。すっごい便利だろ？」
充はそう言って、瞬間、腹を抱えて笑い出した。
ああ、とっても馬鹿にされている気がするよ。
「……」少しむかついたので、何も言わないでおく。
「……何怒ってんだよ、ほら、あれ、生徒会の人じゃないか？」
悪気など微塵もない様子で、充は笑い、視線の先を指差した。
「……ふん、騙されないからな、そんなこと言っても」
俺は充の言葉を嘘と判断し、指差した方向から顔を背けた。
「……わあ、沢山来てくれたね。嬉しいな、皆生徒会のこと考えてくれてるんだ。
……ね、駿？」

ピク。
きっと俺の耳は間違ってない。
今、今何か聞こえた……ような。
こう見えても、耳は割といいんだぜ。
まさか、まさかまさか！？
「でもこの中で右腕になれるのは一人だけ、かあ。響会長、誰選ぶんだろう」
間違い、なかった。
横に座る充を押し退ける勢いで、素早くさきほど充が指差した方向に振り向いた。
やはり、そこには。
息を、切らす。
「……あ……！」　彼女がすぐに、俺の視線に気付き、
「君、さっきの！」
嬉しそうに俺に駆け寄ってきた。
俺も慌てて立ち上がり、椅子を離れ先輩の元へ。
「嬉しい！来てくれたんだ！」
いやいや、嬉しいのは俺ですよ。
もちろん、羨みと驚きと妬みが入り混じった他の男子共の視線は徹底無視だ。
ああ、すっげえいい気分。女の子に好かれるのって、なんて幸せなんだろう。
「あ、ま、まあ……。ちょっと、挑戦してみようかなーなんて……」
「本当に！？君みたいな意欲がある子が居てくれて嬉しいな。君が生徒会にってくれたらいいのに」
ちょっと、今の台詞聞きました？聞きましたね？
「……そ、そうですかねえ……」
横から充に思いっきりこづかれた。でもそんなこと気にならない。
え、何々、これってもしかして、少女漫画オチ？
初めは最低の出会いを果たす男の子と女の子が、やがて深くかかわ

るようになり、そして恋が芽生えるみたいな！？
うっわ、やば。心臓バクバクしてきた。
どどどど、どうする？もし彼女が所見で俺のこと好きになってくれたとかーーー！
「……そう思うよね？駿も」
そう言って、俺から視線をそらし、後ろを向いた。
……え？
今、誰かの名前をお呼びになりませんでしたか？
そういえば、さっきも。
このとき、俺は初めて、彼女から少し離れたところに立っている男の存在に気づいた。

年齢はおそらく、俺より上。上履きの色から察するに、この可愛くて優しくて綺麗で素敵な先輩（あ、そういえばまだ名前聞いてないや）と同じだろう。
首筋にかかる黒髪の間から、銀色のピアスが覗く。
背は高く、多分１８０前後。くそ、羨ましい。
切れ長の瞳とモデル並みの長身、そしてその全体が持つ大人びたオーラ。
悔しいことに、俺はどれも持ってない。
「……」
そいつは、先輩の可愛らしい問いかけに、なんら口を開かない。
おい、失礼だぞてめえ、可愛い可愛い先輩を何無視してんだよ、と俺は視線で訴えた。
そうしたらタイミングよくそいつとぴたりと目が合い、その瞳に魅入られそうになって思わず目をそらした。
畜生。畜生畜生。美形なら許されると思ってんじゃねえぞ。
ちょっとドキドキしてる自分がとてつもなく嫌だ。
男のくせに男を意識させるなんて最悪だぞこの野郎。
絶対、こいつ俺の気にいらない人物リストに入れてやる。

そいつは、しばらくそんな俺を眺めた（視線で分かる）後、
「……嫌だ」
俺になんとも言えない視線を送りながら、そいつはそう言って、はあ！？
「な、な……？」
待て。待て待て。なんて言った？
「ちょっ……駿！」
「……こんな馬鹿そうで何の取り柄もなさそうなガキが生徒会？ふざけてる。それに、俺には明らかにそいつがこの学校を変えたいと思ってここに来たとは思えない」
淡々と、時たま俺にどことなく嘲笑めいた顔を向けながら（考えすぎかもしれないけど）、答える男。
「……こいつは、誰がどう見たってお前目当てだろ、藍」
ぎっくううううん。
やばい。ばれてる？や、やばい。先輩に嫌われる。……あ、でも名前藍って言うんだ。可愛いなあ。っていうか何様だよこいつ。確かに俺は普通だけど突然失礼な人だな、ああでも名前分かったからちょっと感謝したいかも。
俺の心の中は、さまざまな思いでぐちゃぐちゃだ。
「……そんなことないよ、駿。それに人を外見で判断しちゃ駄目だよ。意外に……」
そこまで言って藍先輩は、言葉を切った。
そして俺に向き直って問う。
「そういえば……まだ君の名前聞いてなかったよね」
「……え、あ、はい！」
やった。名前から恋する十秒前。マジで恋愛へのカウントダウンだ。
ちょ、どどうするよ？これでもし、生徒会にはいって、仲良くなっ

て、それで「中原君、今日から、雪弥って呼んじゃだめかな？」とか言われちゃったりして
「聞く価値もない」
俺の妄想を打ち砕く、感情のない声。
「……すぐに男に愛想をふりまくのは感心できないぞ、藍。それ以前にまず、こいつが生徒会なんかに入れるわけない。会長はこんなどこにでもいそうな奴を選ぶほど人を見る目が無い訳がない。こんな、自分のことしか考えてなさそうなガキが」
聞いていれば聞いているほど、怒りがふつふつと沸きあがってくる。大体なんですかこの方？俺の何を知ってそんなこと言うんですか？それに可愛い可愛い藍先輩のどこが愛想振りまいてるように見えるんだっての。
俺が藍先輩と仲いいからって妬いてんじゃねえぞこんにゃろう。
喉まででかかった言葉を必死で押さえ、唇をひきつらせ作り笑いを浮かべる。
「……ゆ、雪弥です。中原雪弥」
やった、言えたよ。
「雪弥君かあ、可愛い名前だね」
可愛い。可愛い。可愛い。可愛い。可愛い……
ちょ、皆さん聞きました！？可愛いだって、可愛いだって可愛いだって！
そんなこと言う貴方の方が可愛いですよっ！！！！
「私は、藍。愛するの愛じゃなくって、藍色の藍。よろしくね、雪弥君」
そして藍先輩は可愛らしい笑みを浮かべて、俺の前に右手を差し出した。
こここここ、これは握手してもいいということなのでせうか……！？
思わず古語になるほど頭が混乱&ときめき。
生きててよかった。多分、俺は今、この場で彼女の手を握るために生まれてきたんだ。そうだ。

今しかない。早くやらないと、また後ろの野郎に何か言われてしまう。
「……あ、はい、よろしくおねがいしま……」
自分のできる限り最高の笑顔で、俺はその手を取ろうと
「あああああああああっ！おい、雪弥、もう面談始まってるぜ！？ほら早く並べって！何やってんだよお前は！」
耳に残る大きな叫び声が背後から響、その瞬間俺は耳と髪を掴まれた。
「……さあさあ、ほらほら雪弥、早く行かないと面談できなくなっちゃうじゃん。早く早く」
とてつもなく楽しそうに笑いながら、俺の体を引きずり椅子に連れ戻しているのは……言うまでもなく、高蔵充君（十六）だ。
こ、このやろおおおおおっ！
くそ、あの生意気な先輩のせいですっかり忘れていた。
俺の最大の敵は、俺の隣にいたんだってことを。
「……え、あ、あのちょ……！」
最後の手段と思い藍先輩を見つめるが、先輩は俺の気持ちに気づくことなく、
「あ、そうだね。じゃあ、面談頑張ってね。雪弥君」
そ、そんなあ。
後ろの男をちらりと見ると、口元で馬鹿とあざ笑われているような気がする。
腹が立つ。気のせいでもいい。あいつのせいにしてやる。
俺と先輩の仲を邪魔する敵め。
「……ほおら雪弥くーん。ちゃんと生徒会長とお話しないとー」
まあ、もっとも、本当の一番の敵は、こいつなんだけど。

＊

私は、八年間ピアノを習っていたので、ショパンの曲は全部引けます。
俺は、野球で中学生代表に選ばれたことがあります。
小学生の頃はドイツに住んでいて……
絵画コンクールで最優秀賞を……
中学の間二期に渡って生徒会長を務めていて……
中学の成績は常にトップから五番以内で……

「……ありえないよ」
俺は、人の会話を盗み聞き、そして凹んでいた。
ありえない。皆超人じゃないか。
俺なんか……成績は赤点とったことないってくらいのレベルだし、運動神経だってビリになったことはないってレベルだし、音楽もジャイアンにならない程度だし、芸術だって……と、とにかく。
皆、すごい人達ばっかりだ。
不安を消そうと皆の面談をこっそりと聞いていたのだが、これじゃあ余計不安になってしまう。ていうか現在進行形でそうなってしまった。
ど、どうしよう。
隣の敵・充に視線を送る。が、
「……んー……待てよ、もう俺食べられないからさ…」
「……寝てるのかよ」
どこまで役立たずなんだ、こいつは。
人の恋路を邪魔してくれた挙句、こっちが困ってるときには寝てるんかい
「……どうしよ……」

クラス自己紹介での悪夢再び、だ。
やばい、やばいやばいやばい。
そうだ、と、とにかく落ち着こう。ええっと、掌に人って三回書けばいいんだっけ。よし、や、やろう。やるぞ、よし。
俺は震える右手を開き、その右手に左手で線を引こうと
「はい、次の人どうぞ」
「……」
……俺ってもしかして、すっごくタイミングの悪い男なんじゃないんだろうか。
仕方なく、いつのまにか馴れ馴れしくも肩に寄りかかって寝ている充を振り払い、立ち上がった。
そして、震える足取りで前に進み、ドアノブに手をかける。
そう、そうだ。会長だろうが副会長だろうが俺と同じ人間だ。そう、きっとそうだ。きっとじゃなくて絶対そうだ。
だかた、大丈夫、落ち着け、落ち着け俺。
ただ俺が自分の力を言えばいいだけだろう。よし、できる、できるぞ中原雪弥。
できたら、藍先輩との幸せ学園生活が待っているぞ、俺。
勇気を振り絞り、ドアノブを捻った。

……そこは、異質な光景だった。
足を踏み入れた俺がまず目にしたものは、
「……いらっしゃい、はじめまして」
集会で体育館のステージに立っていたときと同じ、いや、同じじゃない。
その時よりもさらに格段美しいオーラを放った男…だった。
「……っ」
何故かあまりのその美貌に、目が合わせられない。
な、なんなんだこの学校は。さっきのむかつくあの野郎といい、美形なら許されると思ってるのか。

「……生徒会長の、響（ひびき）です」
そう言って、生徒会長様――――響という名前らしい――――は、その美貌にふさわしい爽やかな笑みを浮かべた。
「……え、ああ、あ、は、はい……」
「そんなに緊張しなくていいよ？僕、そんなに外見怖いかな？」
くすくすと笑う会長。
外見？いや、外見全く怖くなさそうですよ。
「……え、あ、あ、い、いえ……」
なんだか、自分でも上手く言葉が紡げない。
何を言おうとしているのか、自分でも分からなくなりそうだ。
「駄目だよお、響い」
その時、俺の右サイドから声が響いた。
「ほとんどの人は響見たら緊張しちゃうって。そんなこと言ったら余計に緊張しちゃうでしょお？分かってないなあ、自分の顔をー」
それは、少年だった。
軽く撥ねた金色の癖髪に、大きなぬいぐるみのような茶色の瞳。
その小学生アイドル張りに可愛く幼い顔と表情と、低すぎる身長は、どう考えても先輩とは信じがたい。
でも会長とタメ口で会話しているということは、この子……じゃないこの先輩も三年生なんだろうか。人間って奥が深い。
「……まあ、今回は美琴の言うとおりだよね、響。一年生を怖がらせないように」
その小柄な少年の横で、茶髪の少年がくつくつと笑った。
身長はおそらく俺と5センチほどしか変わらない、割と小柄な人だが、その美貌は会長に勝るとも劣らない。
どことなく人を冷めて見据えた瞳、整った形の唇や鼻、そして何よりその魔術的な声。
やはり、この綺麗な人も三年生なのだろうか。
ていうか、なんでこの場所、こんなに美形ぞろいなのさ？
おかしいよ、何？もしかしてこの学校の人、生徒会顔で選んでませ

んか？
会長にあれだけ熱を上げる生徒だ。ありえる話だと思う。
まあ俺も、藍先輩の可愛さにやられた一人なので、大きなことは言えないが。
「……ごめんごめん、忍、美琴。君も、ごめんね。怖がらせたかな？」
にこりと、穏やかに微笑む会長様様。
「……え、え、えっと、そそそ、そんなことありませン……」
声が裏返ったのは、きっと気のせいじゃないな。
「それならよかったよ。さ、座って座って。」
先輩に進められ、ロボットのような足取りで用意してあった椅子に座る。
やばい、まだ、足震えてる。
「……じゃあ、早速質問させてもらうね。まず、名前」
にこりと微笑む会長。
ああ、落ち着けよ俺。落ち着け。藍先輩に答えたのと同じように。
「……な、ななな、なか、中原……ゆっ……雪弥でっ……」
うわあ、俺、かっこ悪い。
しかしそんな俺の決まり悪いことこの上ない言葉を、会長はきちんと聞いてくれていた。
「……雪弥君、か。良い名前だね」
その優しい言葉に、少し肩に圧し掛かった何かが降りた気がした。
軽く安堵の息をつき、会長を見つめる余裕ができた。
「……え、あ、ありがとう……ございます……」
「どう致しまして。それじゃあ、次の質問。君はどうして、この右腕に立候補したの？できれば経緯も具体的にね」
き、来た。
俺は先輩方に聞こえないくらい小さな音で、唾を呑み込んだ。
「……っ、え、ええ、えっと、そ、それ……は……」
何やってんだ、俺。

ただ、自分の力を教えればいいだけだろう。
分かっている。分かっているのに、声が出なかった。
「……っえ……え、えっと……あの……」
「どうしたの？」
やばい、早く言わなきゃ。
気持ちばかりあせり、言葉にならない。
くそ、くそ、何で俺はこんな時に。
「……え、あ、えっと、だから……え、あの……」
やばい、どうしよう、やっぱりまだ完全に心の準備が……
「落ち着いて、いいよ。雪弥君」
その時、俺の様子を眺めていた会長が、震える俺の両手を、優しく握った。
ただそれだけのことなのに、俺からすう、と緊張が抜けていく。
「……あ、あの……」
「緊張してる？うん、気持ちは分かるよ。僕も昔は人前に立つだけで頭が真っ白になって、話すことは愚かまともに壇上に立っていることすら恥ずかしかったよ。だから、君の気持ちはよく分かる」
会長は優しく俺に微笑みかけると、俺の手をもう一度握りなおした。
「…僕が、君の手を握っておくから、だから……頑張って？」
「……っ」
思わず、目の前の人物の優しさに、泣きそうになった。
何なんだよ、この人。こんなに綺麗でモテモテで、おまけにこんなに優しいなんて、反則じゃねえか。文句の一つもつけられないじゃねえか。
「……は、はい……」
自分が、馬鹿みたいだった。
自分の声模倣の力を教えれば、楽に今まで知らなかった俺に出会えるかも、なんて。
なんで、俺はこんな馬鹿なんだ。
会長は、こんなにも優しいのに。

俺が声模倣の能力者だから優しいんじゃない、ただ、迷い惑う俺を励ますために。
馬鹿みたいだ。
俺が声模倣の力を持っているからって、それが何の関係がある？
それだけで何とかなるなんて考えてた俺が、嫌だ。
これなら、生徒会長の追っかけの女子の方が、まだ俺よりマシじゃないか。
彼女達は、少なくても会長の役に立ちたいと思っている。
少なくとも、会長に力を貸したいと思っている。
その点、俺は。
会長に力を貸したいどころか、自分を見付けるための踏み台にしようとしていたんだ。

『こんな、自分のことしか考えてなさそうなガキが、生徒会に入れる訳ないだろう』

あの先輩の言葉が、心に突き刺さった。
言うとおりだった。あの人は、間違ってなかった。
こんな優しい人に、俺は何故、

「……俺は……」
もう、気づいたんだ。
俺がここにいるのは、この人について行きたいからだ。
この優しい人の役に立ちたいと、今心から思ったから。
それなら、せめて何もなくても、他の人と同じように、勝負しようぜ？
「……俺は、中学時代から何もかも普通でした」
「……ええ？」
後ろで小柄な先輩が何言ってるんだ、こいつ、と言いたげな声を上げる。

「……うん、それで？」
会長が、笑う。
その両手を、ぐっと握り返した。
大丈夫、きっと、俺は……大丈夫。
「……成績だけじゃありません、俺は、運動神経も、身長も体重も、容姿すらも、何一つとして平均から出たことのない、どこにでもいる普通すぎる男です」
会長は何も言わず、ただ俺の言葉を聴いている。
「もちろん、生徒会なんてやったこともないし、学級委員や執行委員長さえ、平凡な俺には夢のまた夢の話でした」
一旦、息をつく。
今なら、言える。今いわなきゃ駄目だ。
「……初めは、生徒会なんて全然乗り気じゃなくって……。俺みたいな凡人には絶対できないって。憧れてはいたんですけど、自分には絶対できっこないって。
……そしたら……会長が、言ってくれたんです。……俺を、俺を探しているって……」
「……っえ！？てことは何、もしかしてき」
叫び声を上げた小柄な先輩の口を、もう一人の先輩が押さえた。
「……美琴。静かに」
「……うん、それで？」
眉一つ動かさず、俺の話を聞いてくれる会長。
なんて、綺麗なんだろう。
男同士だけど、いや男同士だからこそわかる、会長の優しさと魅力。
「……それで……俺……とっても嬉しかったんです。まさか……普通の俺が……凡人の俺が……まさか生徒会長みたいなすばらしい人に必要とされているなんて……って、思って。
でも……俺は……本当のところ言うと、やっぱりそれでも自信がなかった。俺の力なんかより、きっともっとすごい人は沢山いるって。
でも本当は、やっぱり気になってたんです。俺でも変われるんじゃ

ないか。生徒会に入ることができたら、俺は新しい自分を見つけ出すことができるんじゃないか、って。」
そして、一瞬言葉につまった。
溢れそうな想いが、瞳にも溜まってくる。
「……頑張って」
会長が、俺の手を強く、握り返してくれる。
負けるな。負けちゃいけないんだ。
俺は、変わりたい！
「……すみません……俺は、俺は自分のために、自分が変わりたいから、生徒会を利用しようとして……能力のことを言えば俺は簡単に生まれ変われるなんて……会長のことを利用しようとしてて……でも……今は俺、俺は……貴方の下で学校を動かしたい……」
最後の方は、きっと声が小さかった。と思う。
分からない。自分でも今どんな風にしゃべっていて、どんな顔をしているのかが。
「……だから、だから俺……本当に……ごめんなさい……」
自分が、何に対して謝っているのか、分からなかった。
「……だから、だから……」

そっと、頭に何か優しい暖かいものが触れる感触がした。

「……頑張ったね、雪弥君」
会長が、俺の頭を撫でてくれていた。
「……本当に……良く頑張りました」
「っ……」
本当に、泣きそうになった。
でもさすがに、ここで泣いたりしたら外に出たときに充から何やら言われてしまうので、それをぐっとこらえた。
「……はい……」
「……ありがとう、もう、君は十分話してくれた…気をつけて帰る

んだよ」
俺が転ぶはずがないのに、俺の気持ちを汲んでくれる。
「はい……」
会長は自らドアノブを捻り、ドアを開けた。
開いたドアの隙間からは、薄く光が漏れている。
「……じゃあ、」
「……ありがとう、ございました……」
丁寧に頭を下げてから、部屋を出た。
不思議と、足取りは軽かった。

「……で、どうすんの、響？」
雪弥のいなくなった生徒室で、忍は笑って言った。
「やっぱ、あの子にするの？」
「だよねえ、声模倣の子だもんね。ラッキーじゃん」
美琴は楽しそうに笑うと、ポケットの中から飴玉を取り出し口に含んだ。
「……いや、違うよ美琴」
男性にしては高めの、美しいアルトボイス。
「……僕は、例え彼が能力者でなくても、生徒会にいれるよ」
そして、笑う。
「彼には……僕が見て、何かの“可能性”を感じるんだ」
「……可能性？」
美琴が呟く。
「……ああ、だから僕は、自分の直感に賭けてみたいんだ。駄目かな？……もちろん、千歳や駿、藍や純にも許可はとるけど……君たち二人はどう？」
「……俺は、とりあえず響の直感って奴を信じておく」
忍は、くすくすと面白そうに笑った。

「……それに俺も、ちょおっとあの子から色々感じたからね」
「……美琴は？」
「僕も、忍がいいなら……」
美琴も、ぺこりと小さく頭を下げた。
「ありがとう、二人とも」
響はくす、と口元で笑い、小さく呟いた。
「……とっても、楽しみだね……中原雪弥君」

第五部～愕然、奴らの本性～

生徒会会報！第五部～愕然、奴らの本性～

「……は、はあ……はあ……はあ、は……」
生徒会室の前から逃げるように立ち去った俺は、あまりの緊張と疲労のために、廊下に座り込んで荒く息を吐いた。
あんなに緊張したのは、初めてかもしれない。
もう終わったことなのに、それでもこの心臓の激しい高鳴りはまだ収まりそうにない。
「どうしたよ雪弥。偉い疲れ果ててるじゃねえか」
充が、俺の肩を叩き、相変わらずの軽口を叩く。
俺は背後の充を軽く睨み付けた。
この野郎、俺が生徒会室でどんな思いだったのかも知らないで。
まあ、俺の恋愛の邪魔をした上本当に助けて欲しい時には眠りこけるような男にまともな救いなど期待しても意味はないけど。
「……うっせえなあ……俺にも色々あったんだよ色々」
まさか会長の前で泣きそうになったなんてこいつに話したら、一生の汚点だ。
まずげらげら笑われ、その後クラスの皆に言いふらされるのがオチだ。
「ふうん、色々ねえ。まあそれはいいとして、どう、手応えは」
楽しそうな、充の声。
手応え……ああ、そんなものすっかり忘れてしまっていたよ。
絶望的な、ため息が漏れる。
「……り」
どうしても、声は小さくなる。
「……は？」

充が変な顔をして俺を見つめる。
「な、何て言ったんだ、お前？」
「……絶対、無理」
多分俺の顔は引きつっていたと思う。
「はあ！？何言ってんだお前はよお……」
「だだだだって！名前もまともに言えなかったしどもりまくりだったし！」
そういう俺の声は、次第に小さくなっていく。
話せば話すほど不安が増し、自信がみるみるうちに減退していくみたいだ。
「やっぱ、俺には無理なんだよ」
ため息を吐き、下を向いた。
いい、もう。どうせ期待したってどうしようもない。
「な、何言ってんだよ、おま」
だって、無理だよ。……いくら俺が声模倣出来ても、あんな奴生徒会はおろか学級委員にもしてもらえねえよ……」
そうだ、だって俺は普通なんだから。
俺が生徒会長だとしても、あんなに頼りない少年を誰が生徒会に入れたいと思うか？
ただ、恥をかいただけなんじゃないか。
知ってるよ、どうせ俺みたいな凡人には、一瞬の輝けるチャンスすら得られないんだってことは。
普通の人間には、自分を変えることすらできないってことは。
『あの日』から、よおく知ってるはずなんだ。
「……そお……かよ」
俺の不安そうな言葉を聞いて、充はしばらく俺を見つめた後、
「……ばあか」
重い口を開き、そう言った……ってえあああえええ！？
だ、誰が馬鹿だ。俺か、俺なのか！？
ふつふつとこみ上げる怒り。

馬鹿？頑張った親友に向かって馬鹿は、さすがに酷すぎるんじゃないか？
「……なっ……！だ、誰が馬鹿だっ……！」
思わず荒い声を上げる。
「だって、馬鹿じゃねえか」
充は、下を向いて小さな声で呟いた。
「……結果も出る前から何にも選んで貰えないなんて……何で思い込むんだよ」
聞き取りにくい声だったけど、でも確かに聞こえた。
少し、泣きそうな声だった気がした。
「……みつ……る……？」
俺より明るくて、滅多に事を荒だてない充が、泣く？
小さな声が、少しずつはっきりと涙声に変わっていく。
普段ふざけ調子の充が、肩を震わせているのが見て取れた。
「……何で、決めつけるんだよ。何でいつもいつもお前は、自分には何も出来ないなんて思うんだよ。
……お前が知らないだけで、お前は…お前には色んないいところ、あるし、
お前は色んな奴を幸せにしてる、お前のお陰で、沢山の人が幸せになってきたし、そして、これからも……」
そう言って、充は口を噤んだ。
俺は呆気にとられ、ただ悔しそうに唇をかみ締める充の顔を見つめていた。
充の言いたいことの意味が、分からなかった。
何で、充は俺にそんなことを？
どうして、そんなに泣きそうなんだよ？
なあ？
「……気づけよ。気づいてくれよ、お前が駄目な奴なんかじゃないってこと」
そう、言われた。

意味は、やっぱり分からなかった。
でも、心の底から、喜びのようなものがかすかに沸き起こるのを感じた。
充は、俺を俺より見てくれている……？
いつもふざけてばかりで、俺をからかって邪魔して笑ってる充が、今、俺の為にーー
瞳が、少し熱くなった。
「……充……」
充は、俺をちゃんと見てくれていた。
その事実が、ただ嬉しかった。
そんな親友に、これ以上悲しそうな顔はして欲しくなかった。
充が何を言いたいのかは分からないけど、でも、純粋に喜んだ。
「……ごめ」
「……なあんて。マジにしたろ？お前」
……は？
申し訳なさで一杯になり、頭を下げようとした俺に、笑い声が振った。
「……く……くくくっ……はは……やっべえ、おかしすぎて笑い死にそう…」
背後の声の主は、くつくつと声を立て笑い始める。
訳が分からず、初めは呆然としていたが、腹を抱えて笑う充をじっと見つめていると、今度は喜びとは違う感情が腹の底から沸々とわきあがってくるのを感じた。
なんだ、こいつ。
俺の、俺の謝罪の気持ちを返せ、今すぐ返せ。
「……みー、つー、るー？」
「ああ、わりいわりい。そんな怒るなって、ちょっとお前の反応が見たくなって言ってみただけだろ？！軽いジョークだよジョーク！」
あんなに人を困らせるジョークがあるか！
「お前……俺をからかってるだろ？」

「んなことないって、だって雪弥はいつでも面白いじゃん、……あ、」
「……充……お前締めるっ！」
充が、俺の手でボコボコになったことは言うまでもない。
人を心配させた罰として、多少懲りてもらわないとな。
それにしても、
ていうことは、やっぱりあの顔も、嘘だったの…かな。
そんなこと、まあどうでもいいことなんだけど。

＊

そして、いよいよ結果発表。
放課後、俺は（何か言われそうだから本当は連れていきたくなかったけど仕方ない）充を連れて、生徒会室前に向かった。
昼休みにやった面談が放課後に結果発表なんて早すぎるとは思うが、生徒会の考えだから仕方ない。速くても短所はないし。
そして、右腕候補の全員の前で、生徒会長自らの口から右腕を誰にするか、発表する。
やばい、かなり緊張してきた。
でも、結構心は冷静だ。
あの時は緊張しまくってた割に変なプライドがあって、どうしても右腕にならなきゃみたいな気持ちがあったんだけど、少し授業を受けて冷静になってみたら、
『なんか、右腕に慣れなくてもいいかなあ』と思えるようになった。
そりゃあもちろんやれるものならやりたい。でも、何だか充のお陰で（冗談だったけど）少し吹っ切れた。
もう、俺は十分頑張った。
だから選ばれなくても、きっと俺は成長することができたんだと思うから。
「……わ、もう結構来てる」
やっぱり早く出たつもりだったのに、既にほとんどの候補者が揃っ

ている。
さすが、美形生徒会は伊達じゃない。
女の子の中には、再び姿を拝見できるであろう会長を想像し、すっかり恋する乙女の瞳になってしまっている人もいる。
やっぱ、すげえや、会長。ビバ美形だ。
「……」
右の拳を、きつく握り締める。
もう怖いものなんてない。
だって俺は、やれるだけのことはやったんだから。
「……ま、ここまで来たら俺には何も言えないけどさ」
充が軽く笑いながら言う。
「とりあえず期待してるぜ」
「……サンキュー」
そう言って、俺も笑う。
よし、頑張ろう俺。
すると、唐突にトイレ行きたくなってきた。
我ながら緊張感ないなあ俺。時間いつからだっけ。
「……充、発表何分からだっけ？」
「時間？ああ、確か二十分だろ？」
充は俺の言葉に右腕の腕時計に目を落とす。
「今は何分？」
「今は五分ジャスト。あと十五分はあるぜ」
ああ、よかった。
さすがに我慢しておきたくないし、今のうちにトイレ行ってこよ。
「……じゃあ、おれちょっとトイレ行ってくるよ」
「はあ！？お前緊張感無い奴だな！」
充が変な顔をして叫んだ。
……ほっとけ。それに俺もちゃんと自分で分かってる。
「大丈夫だって、すぐ戻ってくるからさ」
充に背を向けて手を振り、歩き出す。

ええっと、どこにあるのかな。生徒会室って三階だからなあ。三階のトイレってどこだろう。
俺達一年生の教室は一階にあり、三階なんて移動教室の時くらいしか使わないみたいだし（おまけに入学してまだ一週間しか経ってないし）、土地勘もないし。
どうしよう。三階ってことは三年生の教室があるってことだから、通りがかりの三年生にでも聞いてみようかな。
しかし運悪いことに、もう放課後になってしばらく経ったからなのか、廊下には人の姿は見えない。
やっべえ、どうしよ。
俺方向音痴だし、滅茶苦茶行って迷っても困るし。
「……どうしよ……」
俺が辺りを見回しながら困り果てていると、どこからか声が聞こえてきた。
「……よ、……って、……じゃん……」
「……？」
聞き覚えのある声だった気がした。
とりあえず、誰か教室に人がいる。それだけは判明したので、少し緊張しながらも教室に近づく。
ドアのところには『３－Ａ』と書かれている。
俺がこっそりとドアの隙間から中を覗くと、
「……あ、会長、この子どうですか！？」
少女の、声。
え、え、え、え、え、え、まさか、まさか。
「……すごいですよお、イタリアに留学後ドイツ語を習得。今は日本語英語ドイツ語イタリア語中国語の五ヶ国語話せるんですよ！！！」
あ、あ、あ、あ、あ、あ、藍せんぱ……！
ドアを思いっきり叩きたくなるのをこらえ、俺はじいっと見入った。
よく見れば、そこにいるのは全員知った顔だった。

知った顔だった、否、『今日知った人物』……だ。
「……俺はその子、ちょっときついかな。何か生徒会に入って内申上げて欲しいっていう感じがしたな、俺は」
そう呟いたのは、会長に負けず劣らずの美貌の先輩。名前は分からない。
「僕も、忍が嫌ならいいよお」
そう頬を膨らませたのは、小柄で愛くるしい外見の先輩だ。
うわあ、もしかして、これ、見たとおり生徒会右腕の候補調査？
すごいなあ、こんなギリギリまでやってるんだ。すっげえ。
「……うん、彼も素敵だと思うよ」
そう笑ったのは、やっぱり麗しき生徒会長様だ。
「……でもやっぱり、僕の中ではもう彼しか右腕にする気はないな」
……え？
何、今の発言。
も、もしかしてもう決まってるの？右腕。
何何々！？すっごい気になるんですけど！
「……本気ですか？会長」
そう、少し困惑気味に口を開いたのは、……ってえ、あ、あのムカつく先輩じゃねええええかよ！
何、あの先輩も生徒会！？た、確かに藍先輩と仲良くしてたけどっ、でも……うう、認めたくねえ。
「うん、本気さ。僕は彼しか右腕に適任なのはいないと思ってる」
うわあ、すげえなあ。誰か知らないけど会長から絶賛されて。
いくら選ばれなくてもいいとはいえ、あそこまで会長に気に入られているとちょっと悔しいかもしれない。
「……私もいいと思います、会長」
ああ、どこの誰だか知らないけど羨ましいぜこんにゃろう。
藍先輩からも絶賛浴びるなんて。
「……俺と美琴はさっき言った通り全然ｏｋ。後は？」
超絶美貌の先輩が笑う。

「……純はさっき連絡を取ったら全然大丈夫だって。皆がいいって言ってる奴ならきっと俺も大丈夫って言ってたよ」
会長はそう言って笑い、そして、少し顔を曇らせる。
……ん？どうしたんだろ？
「……千歳は……分からない。今日も帰ったみたいだし。……多分……いいと言ってくれるとは思うけど……」
千歳？純？
聞かない名前だ。この場にはおそらくいないのだろうが。
「……まあ、多分大丈夫ですよ。千歳さんはきっと」
ムカつく先輩が、ぽつりと漏らす。
「……あああああっ！」
突然、可愛らしい先輩……美琴とかいう名前だった筈だ…が声を上げた。
その声に俺はびくりとし、危なくドアに右手を打ち付けそうになった。
せ、セーフ。
こんなとこで盗み聞きしてることがばれたら、大変なことになる。
あれ、そう言えば俺、トイレ行くんじゃなかったっけ？
「……ど、どうしたの美琴」
「こ、これ何！？」
先輩の指差す先には、赤い包み紙にくるまれた箱。
「さっき、響のファンからお菓子預かってきたんだ、渡し忘れてたよ」
美形な先輩がそう教えると、無言でにこにこと、嬉しそうに笑う先輩。
え、なんで貴方が楽しそうなんですか。
「……食べたいの？」
何かを察したらしい会長は、ふうと短くため息をつき、美琴先輩に告げる。
「……いいの！？」

「いいの、も何も明らかに物欲しそうな目をしてるでしょ、美琴。いいよ食べて」
「やったあ！ありがとう、響大好きっ！！！」
先輩は遠慮という言葉を知ってか知らずか、満面の笑顔で包みを乱暴に（本当に顔に合わないぐらいに引きちぎって）開ける。
ちらりと見えたお菓子は、どうやらカップケーキのよう。
いいなあ、美味しそうだなあ。俺も女の子（ていうか藍先輩）から貰いたいなあ。
「いっただきまーすV」
そう言うなり、素早くそれを口の中に放り込む。
「……本当好きだよね、美琴も」
先輩（名前なんだっけ……？）が横目でくすくす笑う。
美琴先輩は、それこそ天使のような顔でそのお菓子を噛み、しっかり味わい、そして、多分次も同じように天使のような顔で、
「……何、これ。最悪」
そう、顔をしかめ、まるでゴミ箱の中に手でも突っ込んだような顔でそう言った。
……ん？え？……ええ！？
「…ちょっと忍、これどういうこと！？すっごい不味いんだけど」
「俺に言われてもどうしようも。あ、でも良かった、俺食わなくて」
……はい？
「え、どういうことですか先輩？これは響先輩のファンがくれたものですよね？」
ああ、藍先輩可愛い。
「……ああ、あれ嘘だよ。ごめんね美琴」
先輩———確か今忍と呼ばれたーーーはくつくつと楽しそうな苦笑いを浮かべながら答える。
「今の本当は俺が貰った奴なんだ。でも俺要らないから、響か美琴にあげようかなあって。だってほら、どうでもいい女からのお菓子とか『要らない』じゃん？」

……要らない……ですと？
ななな、何、この人たち？
すっごい黒いことを連発してません？
「……確かにこれは要らないよ。不味い、不味過ぎ。これ捨てていい？最悪な味」
「先輩は少し舌が肥えすぎなんじゃないですか？」
ムカつく先輩が冷静な意見を述べる。
「そうだよ美琴。あんまり酷いこと言っちゃ駄目だよ」
会長が、息をつく。
ああ、やっぱり会長はいい人だ。
一瞬愕然としちゃったけど、でもやっぱり会長はいい人だよ。うん。
「……そういうこと言ったことが生徒にばれたら、支持されなくなるだろ」
……え？
「だあいじょおぶだもーん。捨てればごまかせるし。だいたいこれ、人間の食べる味じゃないって」
そう言って美琴先輩は、お菓子の入った箱を地面に落とし、憎しみをこめ踏みにじる。
ああ、ああ、何てことを。
箱の形が崩れ、粉々になったカップケーキの姿。
「……相変わらず美琴もやることえげついね」
「それは忍もでしょお？女の子からもらったお菓子人にあげちゃうし」
「とにかく、二人とも世間にばれたら色々言われそうな行動は抑えてね。僕らはこれで終わりだからいいけど、駿や藍の次戦に差し支えるかもしれないし」
「分かってるって、ばれないように言うからさ」
「……ああでも、たまにありますよねー。無理やり色々押し付けられたりするんだけど、正直ちょっと困っちゃいますよね」
「それはお前がその男に何か欲しいって言ったからじゃないのか藍。

自分で言ったのに相手のくれたものに責任転嫁するのはどうだかな」
え、え、え、え、えあ、あ、あの、藍先輩まで？
「だってえ、これ本当不味いんだよー？最悪」
「てか、たまに勘違いしすぎの奴っているよね。俺ら生徒会と自分はつりあうって思ってるんじゃないか、っていう馬鹿」
ばばばばば、馬鹿……？
「本当。いるいる。一般人の分際で調子乗ってるじゃねえよって感じい」
「二人とも、声大きい。話すなら小さい声で話してよ、誰かに聞かれたらどうする？」
「ねえ駿、この人の遍歴面白いよねー。世界選手権で優勝ってすっごい嘘っぽいよね」
え、さっき面談のときその人のこと褒めてましたよね？
「人間なんて嘘の塊だろ。こういう奴はいつか身を滅ぼすんだ」
「藍も駿も会話は静かに、それにもうそろそろ結果発表の時間だよ」
……なんですか、これは。
俺は一体何を見ているのでしょうか？
嘘だよな？

可愛くて小さくて天使のような美琴先輩は、ケーキを踏み潰してゴミ箱に捨てるし、
さわやかなマスクの忍先輩は、人を馬鹿扱いのあげく女の子からもらったお菓子を人にあげるし。
会長はこの二人の行動に対して注意しないし、隠れて策略家だし。
藍先輩は笑顔ですっごく怖いこと言ってるし。
あいつはあいつでこの状況にただ頷くだけだし。
なんだよ、ここは……！
何よりも、何よりも、誰もこの状況に対してつっこまないのか？
この性格悪すぎ集団が……！
俺の中で、何か名前のない美しさと憧れが音を立てて崩れていく。

「……え……」

ガタリ。

気づいたときには、もう遅い。
俺の肘は、驚いた衝撃で、軽くドアに打ち付けられていた。
「……誰かいるのか？」
やばい。
血の気が引いていくのが分かった。
やばい、やばい、やばい、やばい、やばいやばいやばいやばい！
息を荒くつく。
「……誰かいるんだろ？出てきて」
会長の、少し怒ったような声。
やばい、俺もしかして殺される？
指先から寒気にも似た震えが走る。
でも、でも、何か言わなきゃ。
最悪じゃないかあの人達。性格性悪だし。
そ、そうだ、俺は生徒会の秘密を握ったんだ。
何の怖いことがある？何も怖くないだろ？
そうだ、勇気出せ中原雪弥。弱味を握ってるのはこっちなんだぞ。
……で、でも、
もし先輩達が本当は会話ほど悪い人じゃなくて、俺の勘違いだったら……まさか、
いやまさか。明らかに口悪すぎだろ。でも、でも……

「あ、雪弥君？」
肩が、跳ね上がった。
あああああ、ややや、やばいやばい、ばばばば、ばれた。
しかも、俺の耳が正しければ、
「……ほら、やっぱり雪弥君だ」

よりにもよって、藍先輩にっ……！
「会長――！雪弥君ですよ！」
しかも言わないでええええっ！
やばい、本当に殺される。助けて神様。
俺は無信教だが、救ってくれたら例えキリストだろうとガウタマだろうと孔子だろうと誰だって信じてやるから。
「……雪弥君？」
会長が一瞬整った顔をしかめ、俺に歩み寄ってくる。
ややややや、やばい。本格的にやばい。
「あれま、新右腕が盗撮ですか。まあ、それもそれで面白いけどね」
忍先輩がくつくつと笑う。
会長は俺の目の前に座り込んで、そして綺麗な色の瞳で俺をじっと見据えた。
「雪弥君……聞いてた？今の話」
本当なら何があっても否定したいところだが、あまりにも麗しすぎる先輩に見つめられては、否定するなんてできなかった。
どこ行ったんだよ、俺の度胸。
「……す、すみません……」
ああ、きっと俺の人生は今日で終わりだ。あはははは。もうどうにでもなれ。
いいさ、この１６年、満足とは言わないがなかなか楽しかった。いつ死んでも本望だ。
ああ、でもできれば死ぬ時ぐらい藍先輩の膝の上で……

「……よかった」
会長は、はあ、と小さくため息を吐いて、立ち上がった。
「安心したよ。君なら大丈夫だ」
「……」
唖然として、動けない。
まままま、マテ。待て。マテ。今なんて言った？

『俺なら大丈夫』？そう言ったよな、この方は。
まままま、ま、待て、
「ど、どういうことですかっ！？」
死ぬ覚悟をしていたことも忘れて、思わず叫んだ。
やば、聞いちゃいけなかったのかな、と思ったときには既に遅い。
しかし会長は、俺の無礼な質問に怒った様子は見せなかった。
「どういうことって？」
寧ろ、笑ってる？
うっそお、めっちゃ意外。あんな腹黒集団なのだから、きっと俺は即座に息の根を止められると思っていたんだけど。
「……え、あの、だから……そのままの意味なんですが？」
「要するに、何で雪弥君は怒られないのかってこと？」
首をかしげる藍先輩。ああ、可愛い。可愛すぎる。
さっきの台詞さえ聞かなければ、天使だ。
「あ、はは、はい」
「そんなの当たり前じゃん、雪弥君」
藍先輩が笑うと、会長も、忍先輩も、美琴先輩も、あのむかつく先輩でさえも、いっせいに藍先輩の言葉に同意した。
あ、当たり前？どういうことだ？
「だって、」
藍先輩は、その天使のような顔でにっこりと微笑み、
「だって、雪弥君は右腕になるんだよ？仲間の間に、隠し事はなしに決まってるじゃん！」
ああ、成るほど。
ようやく、俺の中で一つの輪が繋がった。
成る程なあ、俺が右腕か。だからばれても問題ないってことだな。
どうせ生徒会に入るんだから。ようやくこれで納得した。うんうん、俺が会長右腕、……は！？
「……ま、まままままままま待ってくださいっ！」
待て、待て待て待て。今何て言った。もう一度今の言葉をワンモア

プリーズ。
今、とんでもない言葉を聞いた気がしたんだが、気のせいだろうか。
まままま、まさかな。待て待て。落ち着け俺。頭がどうかしてるんだ、俺。
「え、何？雪弥君」
「いいいいいいい、今、ななな、何て言いましたか！？」
藍先輩にしがみつく形で、必死でたずねる。
かっこ悪いことこの上ないが、俺はそれより何より頭がくらくらしていた。
「……やっぱり面白いなあ、君は」
忍先輩が、いつものような笑みを浮かべ、俺に向かって声をかける。
「さっき、俺も言ったんだけどね。君が『右腕』だって。なのに全然聞こえてなかったし、今の藍の言葉も信じられなかったみたいだし。本当面白いよ、君は」
……え？
さっきも言った？いつ？どこで？

『あれま、新右腕が盗撮ですか。まあ、それもそれで面白いけどね』

……ふふふ、普通に言われてたっ！
て、てことはですね、ええ、もしかして、いやもしかしなくても、もしや、もしや俺が、
「おめでとう、雪弥君」
麗しい生徒会長が、俺の肩に右手を乗せた。
「君が、今期の会長補佐だ。よろしく頼むよ、中原雪弥君」
まじですか……？
瞬間、体がぐらりと傾きそうになった。
幸い、五体満足の俺の体は、どうにか倒れるのを防いでくれたが、
ああ、それにしたって。
「本当……本当に、俺が……？」

喜び以上に、驚きと不安。

まさか、俺みたいな臆病で、普通で、声模倣しか取り柄のない俺が、本当に右腕なんかでいいのか……？

それよりも、まず。

俺は、こんな外見天使様内面悪魔様な生徒会の皆さんと一緒にやっていって、生きていけるのでしょうか。

命の危機を感じます、お母さん。神様。

「……それなら。響。『あれ』は？」

忍先輩が、面白そうにくすくすと笑った。

「そうだよお、響。生徒会に秘密はなし、でしょお？藍もそう言ったよ」

美琴先輩までそんなことを言い出した。

何、会長の秘密？まあ、会長が皆から思われているほど善人でないことくらいは分かったが、更にすごい秘密でもあるというのか？

「……そうだね……」

会長はあきらめたようにため息をつくと、俺に向き直った。

またまた、真剣な瞳で見つめられ、男ながらにどきどきしてしまう。

馬鹿じゃないか、俺。いくらあまりのことに驚いているからって、男にときめいてどうする。

「……雪弥君」

ちょ、ちょちょ、顔近いですよ！

「今から見ることは、生徒会内部以外には絶対漏らさないで欲しいんだ」

「は、はい、はははははは、はい」

止めてください、理性跳びそう。

忍先輩ではないけれど、自分の美貌を自覚してくだサイ。

死ぬ。俺は呪い殺されるのと別の意味で死にそうです。

「……お願いね？」

「ももも、もちろんでゴザイマス」
言えるわけないだろう、天下の麗しき生徒会長様に美貌で脅されては。
「……有難う」
そう言って会長は優雅に微笑むと、おもむろに自らの流れるような美しい髪に触れ、そして、
「……え！？」
そのままそれを引っ張り、するりと地面に落とした。
そしてその下から現れたのは、元あった髪の二、三倍の長さの長髪だった。
長い髪を纏う姿は、まるで、
「……か、いちょ？」
「ごめんね、今まで隠してたんだけど……」
そう言って、会長は笑った。
ああ、もしかして、いや、もしかしなくても。
「……僕の名前は、響（ひびき）。本名は、城谷響（きょう）。学校では男で通っているけど、本当は、女なんだ」
……はい？
何かの冗談ですか？ねえ？
「……え、は、ははは……」
今度こそ、俺の体はぐらりと傾いた。
五体満足でも、どうしても認められないものはあるらしい。
ああ、神様。
俺はこれから一体、どうなるのでしょうか。

第五部～愕然、奴らの本性～（後書き）

お久しぶりです……。
まだまだ続きそうな連載です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4527a/

生徒会会報！

2010年11月12日22時04分発行